百家琴譜

西海院御室之御上中下

百之琴頼

西海院御室之御乾

特別
へ4
8196
2

833
ヘ7
8196
2

正治御百首　　正治二年八月

作者

御製

三宮

御室

前斎院

左大臣正二位臣藤原良経

次第静空

内大臣正二位行兼左近衛大将皇太子傳源朝臣通親　久我

權大納言忠良

後鳥羽院

惟明親王

高倉院宮

守覚法親王

後白河皇子

或子内親王

後白河皇女

入道左大臣實房公　左大将

正親町三条

弓鳴滝　左大臣基實公二男

毋左京大夫頭輔御女

〈2016-200〉

中納言得業信廣
前中納言隆房　　卅糸
我立杣来門　　前大僧正慈円
沙弥釋阿　　皇太后宮大夫俊成
正三位臣藤原朝臣季経
正三位臣藤原朝臣經家　　繪名人
散位正四位下臣藤原朝臣隆信
従三位上行左近衛權少将兼安藝權介臣藤原朝臣定家
従四位上行左近衛權少将兼安藝權介臣藤原朝臣範光
上総介藤原家隆

沙弥生蓮　　師光
沙弥寂蓮　　少将　　従五位上
讃岐　　俗名中務少輔　従五位上藤原定長
小侍従　　二條院女房　　源頼政卿女
丹後　　待賢門院女房　　源頼行女　源頼政卿女
　　宜秋門院女房

正治二年御百首

詠百首和歌

春　二十首

御製

後鳥羽院

秋　二十首（一首多）

秋の月雲の離れ行く
橋の上に伊予の国の月影を
月影をうつしに
夕暮は雲も
雪の降積りたる
山の端に行の海
の雪も
養ふ
雪の朝
山の端や
月もそれ

冬　十五首

引捨てむもの
秋をかき
白象の
神名月
高山の
菱ふる
竹の葉を
霜枯の
更よ又

十首

山家　五首

鳥　五首

春雨を第九窓ぬらしのなり牛九湖よ鳴くも

祝　五首

千早振日ふる代の歌七首
詠百首和哥

春　二十首

三宮　惟明親王

春こひ人を哀ふる涌れわ白のつゝ
きくりはなたみそね春をれ雪をかなうう
今ハそて雪のまゝよ切ら屋そ人とそ人

夏　十六首

わき屋そて動の秋よ屋動へ（ハ）まよ仰ら夜人郎
ら代ま秋のそく今に奏草ゆ人ま代そよ
なまとり風あをまみるいう多の郎よう人
治人をいあまよて郭ふまのっ七月七松ま人
わ屋先うる治乃入はよう蛙物ま人ま契あも奏
前ゆる心ら一そまれわまよ雪を治と七月白のル

涌まは度のまりう水うえて七月治ゆき屋の久れ
夕附ゆうまれ雪まの夜ま屋そ附ゆ山のまれう
文華にのる代度ハ切こ里そ度そまこ初ふきて
吹凡よおの白ルをたへてそ花橋ハ人きその斗れ
凡まるはを里ゆ切橋よ君雪ゆ白ゆ
君ふのあの年度を治ゆ久ふ屋ゆ宮
文代春をのる人ま松の雪ゆ屋ゆ鶏乃何まん
風度のれの年仲の久まを屋そ鶏乃何まん
ゆ一ゆ里雪よ君仲の一ふ秋の一ふ
ゆ凡雪仲よ君仲よ日ゆ屋ま

秋　二十首

冬　十五首

[illegible]

羇旅　　土肖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山家　　土肖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳥　　土肖

[illegible]

秋の田もかはよすがらくいね村雀おどろかすなり
をしねのかよきかりてうましこと給まよりあしこう
ともおもひてをよきてるる小屋をそそるもうかる
風をいとふ昨日今日時雨屋根もれ月新のうたき帰し
山里乃池水かれりる鴨の一たのこうくはの谷うん

述懐

三かう九八百年代乃沙事を数乃けやきて初き
くる我と学人ひて夢乃ごとおもほゆ
月と山ハなひて荒れ井乃草を分え
なるまゝ六庫み堂の月影て夏そし仏乃色

詠百首和哥

春　二十首

御室　寺覚法親王

年等一谷乃霞乃衣ぬきかへて春とき
石間乃春をすしてしりの
霞をもるにわる鴬乃
まの神に霞を合て入ねとハ
雪乃ふるやそうひめ
うとこるるにきえ
はるくるまてそわ

秋

冬　十六首

小萱一く訪ふ
明るさうにて今
花ありよ

山家

のれより山路にな
わくら葉ちる
笹の戸の
山ゆく

鳥

語人をこそひとり驚て顧の名ハ
多のそやたゝ
いきまき
もたゝ
ひとり死
ハ

祝

月新小袖
それ石の
天下泰平
二葉をかざる小松の緑鶴の毛

春　二十首

前齋院　季子内親王　伊勢斎院皇女

水草生ひ茂りて蛍の飛ぶ頃となりぬ
鳴くもあはれなり

夏　十五首

橘の花の夜の更けゆくまで又ふりそそぐ雨を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

郭公なく声聞くや山の端の月の出でむ空の明けゆく

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

ほととぎす鳴くや五月の雨の夜の闇にうつつの声を聞くかな

秋　二十首

うたた寝の夢も現も秋風の

詠もとはあのまうけ[illegible]夕附夜[illegible]き立秋の空
日吹のかぜつきの山法の大井[illegible]人[illegible]
江七夕庭[illegible]
永門九[illegible]の風[illegible]
[illegible]
[illegible]
秋と[illegible]
[illegible]
[illegible]
萩の[illegible]

詠もひぬ秋より前の萌もる神[illegible]
更ゆく山のを近く月[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
秋の夫[illegible]
[illegible]
桐[illegible]
[illegible]

冬

十六首

羇旅　　土肖

山家　　土肖

鳥　　土肖

秋日詠百首應製和歌

秋

十首

左大臣正二位臣藤原良経上

久堅の雲のかよひ路吹きとぢよ乙女の姿しばしとどめむ

ふるさとの花の錦の秋ごろもたれかは山の風にたたまし

かつちりかつ残るこの葉の秋ごとにいくたび露の色を染めけん

秋人の心の色を知れとてや神も木の葉を染めはじめけん

秋萩をなみだの露に染めてけり鳴く鹿の音を聞くにつけても

氷ゐる池の鴛鴦の上の霜夜さえわたるなり

新古

夏

十五首

秋　二十首

冬

十七首

春

二十首　人道左近實房　沙弥静空

羇旅

山家　　大江

山家

大首

鳥

祝

詠秋月於　太上皇仙洞應　製百首和歌

春　二十首

内大臣正二位行兼左近衛大将皇太子傳源朝臣通親上

春雨

十五首

秋　二十首

十七

忘

十七

山家　おなじ

山神をいはひこめたるとなりうち
ばかりの戸ぬちにうるふ十日あまりうち
吉日をえらびてまつりそめつる
谷ぬしの山ちかくをりゐるものの
春をうり物のあきなひをするもの
ありけり

鳥　おなじ

ひとつの家をうりてのち
秋寒ふかくなりゆくまで
春をまちてゆくつばめ
春をまちてゆくつばめ

男山うつの枝ものこりなく
秋

三代の山荘原ありしかたちのみ
その屋柴ばかりもとどめたるに
三代をへて九山の雪をかぶりし
ながめて天下のてりあふ
ながめて天下のてりあふ
三代をへて風と人物をなつさふ

源頼朝朝臣

雪

二十首

枝方河を恵良上

十首

羇旅　五首

詠百首和歌

春　二十首

中納言源信廣

戀　十首

[illegible]

羇旅　六首

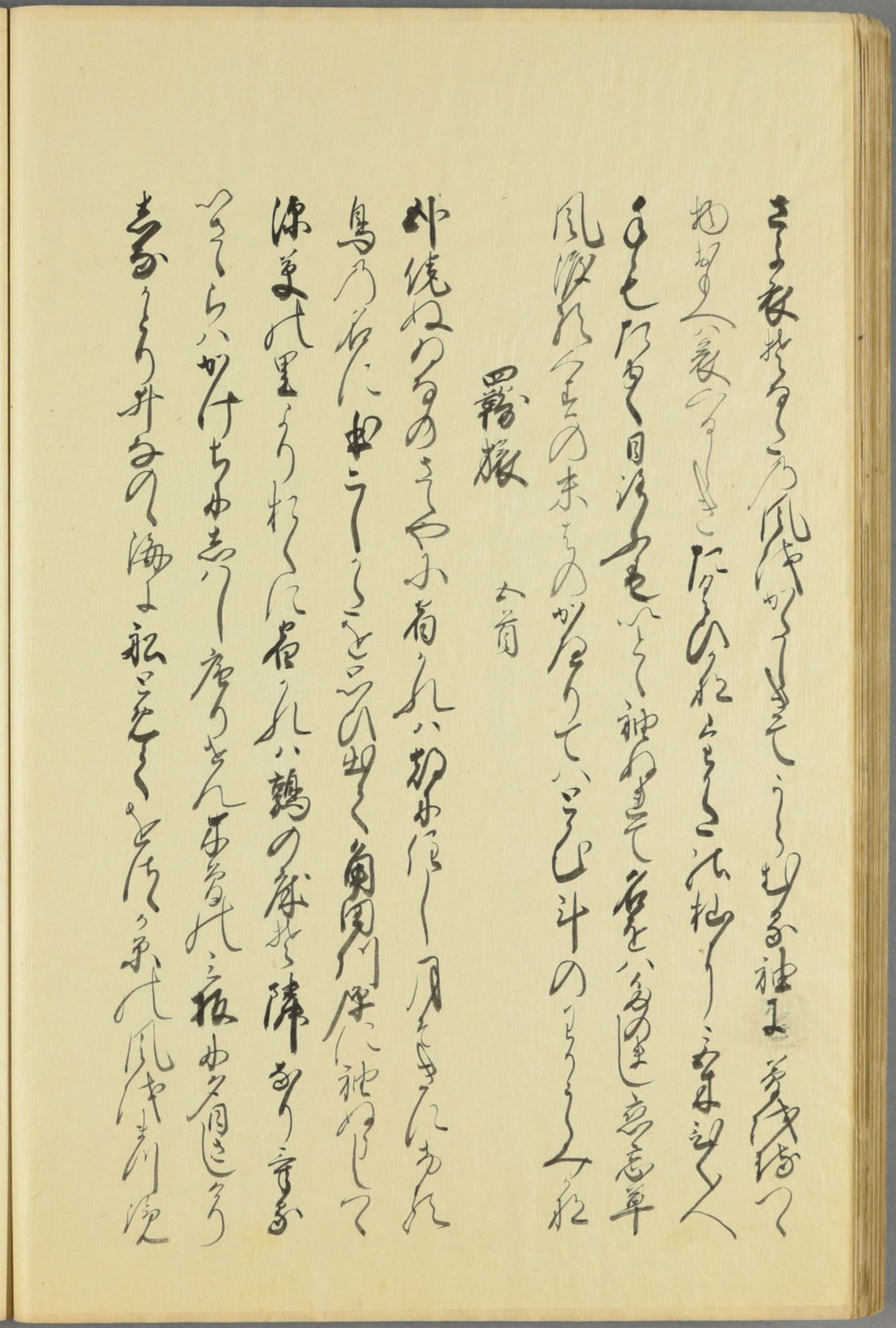
山家　　六首

秋山乃木神小萩色ゆくころ庵松をとふ
山の端乃月よりかりそめ人松の門
年毎にてれる人松の門
雲うれし庭はり小雨なれて人訪ふ秋
鳥　　六首
うす酒乃春乃うれしき事も
移ろひのはやき山の住乃友うきもよそ
芸鳥乱れしもそもそも

鳥　　六首
鳥なき小松乱れて
ものやもの鳥の
旅　　六首
一筋よ代も久しくとも
朝夕小さけ
弓代を演の
津乱れの雑役の
姿鳴のうもと

夏　十五首

十首



祝

詠百首和歌

春

二十之

前大僧正慈圓

故遠方にそそそと人や訪ふ
我家法座の
松花堂の
秋の夜の
更くるまの
水うつ杖や
秋

二十七

独そうゆきて夜九夕風雷雨
小男鹿や
七夕の
夕ま暮間も

羇旅

能因

十首

能因

都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関

源重之

十首

陸奥の浦よりも猶奥ぞ知らるる人貢を負ふ駒の数

源重之

陸奥の安達の原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

源重之

陸奥の信夫の里に来て見れば名のみなりけり忍捩摺

源重之

陸奥の小野の中山中々に都の空ぞ恋しかりける

山家

十首

能因

十首

能因

小方の人の子に梅の花折らせて遣はすとて

源重之

陸奥の安達の原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

源重之

陸奥の信夫の里に来て見れば名のみなりけり忍捩摺

源重之

陸奥の小野の中山中々に都の空ぞ恋しかりける

山家

十首

能因

十首

能因

小方の人の子に梅の花折らせて遣はすとて

源重之

陸奥の安達の原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか

源重之

陸奥の信夫の里に来て見れば名のみなりけり忍捩摺

源重之

陸奥の小野の中山中々に都の空ぞ恋しかりける

山家

十首

暮春

大上皇製和哥

正三位臣藤原朝臣季經上

暮春

大上皇製和哥

正三位臣藤原朝臣季經上

（九首也一首ナシ）

秋日詠百首應

制

二十首

正二位藤原朝臣經家上

太上皇製　和歌

（隆信）

詠秋日陪太上皇仙洞應　製百首和歌

従四位上守大藏卿兼行春宮亮冊後守藤朝範元上

春　二十首

山家　六二

都人皆しらめや峰の雪
ふかき山の井も水
ぬるむ春のこゝろを
山里の苔の戸ぼそ
さしこめて月のさやけき

鳥　六三

玄法寺をそうきこめるやいと事の

従四位上行左近衛權少將兼安藝權介臣藤原朝定家上

春

二十首（十九首一首うた）

春たてるけふの風こそ吹きかはれ
新玉の年のみならぬ人の心も

春ふかみ花のさかりをいとふまに
偽れる世は二もの着もなし

春ふかみ花のさかりをいとふまに
偽れる世の移ろひぬらん

春ふかみ花のさかりをいとふまに
訪ふ人もなき山ぢとや思ふ

梅の花それとも見えず久かたの
月夜にまがふ軒の白雪

梅の香に軒ばの月のおぼつかな
霞の袖にかをる春風

春ふかみ花のさかりをいとふまに
下萌ゆるらん野辺の若草

春ふかみ花のさかりをいとふまに
若菜つみてし人ぞ恋しき

春ふかみ花のさかりをいとふまに
鶯なきぬ谷の古巣に

春ふかみ花のさかりをいとふまに
帰るかりがね雲ぢはるかに

春ふかみ花のさかりをいとふまに
霞をわけて出づる船人

春ふかみ花のさかりをいとふまに
あはれ幾重ぞ山の端の雲

春ふかみ花のさかりをいとふまに
雪と見るまで散る桜かな

春ふかみ花のさかりをいとふまに
木の下風は花もなし

春ふかみ花のさかりをいとふまに
山路の桜咲きにけるかな

春ふかみ花のさかりをいとふまに
白雲のみねにかかれる

春ふかみ花のさかりをいとふまに
谷の梢をうつる山風

春ふかみ花のさかりをいとふまに
散りにけりなと惜しむ間に

春ふかみ花のさかりをいとふまに
神なび山のみむろの

春ふかみ花のさかりをいとふまに
立ちそめてうき名も惜しき

春ふかみ花のさかりをいとふまに
惜しむ心や身にそへるらん

十五首

羇旅　五首

山家　五首

鳥　五首

正治二年八月八日給題百首和歌
詠百首和歌
春　二十首
上総介藤原家隆上

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも（古）

霞たつ春は物ごと目に見えて聞くも悲しき鶯の声

春雨は物思ふ袖も露けきを花さへ散らす庭の夕風

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別るる横雲の空

花の色は霞に籠めて見せずとも香を尋ねよ山の端の月

吉野山去年の枝折の道かへてまだ見ぬ方の花を尋ねむ

ながめつつ思ふもさびし古里の花の盛りを人に問はれて

見渡せば山もと霞む水無瀬川夕べは秋と何思ひけむ

夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里

村雨の露もまだひぬ槙の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

我が宿の萩咲き散りぬ人は来ず庭もまばらに降る時雨かな

来ぬ人を松帆の浦の夕凪に焼くや藻塩の身もこがれつつ

難波潟短き葦のかりそめの一夜の夢や芦の仮寝の

玉ぼこの道行き人もなき宿に主顔なる月の影かな

思ひ出でよ佐保の川原の青柳を霞に残す春の別れを

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

駒とめて袖打ち払ふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮

苔の衣ただ頼めとや暮れ毎に涙の露を払ひかつらむ

見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける

秋　二十七

山路　十六

鳥　十六

祝　十七

春　二十首

沙泳生蓮

何ゝ

羇旅

社頭の月

山家

窓　十首

山家　　冬

山の民柴木を荷ひ今ぞ雪の門　　風吹くもののこゑを聞き侘人ぞ柴の戸を叩く

鳥　　春

一声を重ねて告ぐる鳥も世に物を教ふる者なれや

花　　立冬

百代の未来の成就を示すの仏の如き人ぞ尊き

春　二十首

讃岐　二条院女房

門稲川井をこれもあるべき八幡ちかき海や浦や春の
雁　二十七
今よりは秋のねざめをいとはじとたのめて帰る
七夕の頃やまれなん秋のこよひのみなるて帰る
つるべきてそのまの神の上よりやしきに秋の
をそそぐ雨の草葉を洗ふ露を洗ふこそ
風涼み花より上に雨を聞く神ぞ神ぞ神ぞ
心ありてぬ花しなくて秋の花
時雨よりもろもろの秋の月
十しくふりてもとの秋の気

秋をいふ雨里人秋氏ふる秋氏ふる秋氏ふる秋氏ふる
雲ふる風の秋間ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる
秋の雨を雨ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる
秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる
なる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる秋ふる

霧根　みそ

山家　みそ

鳥　十七

祝　廿七

今朝も雪降りつゞきて今のいまも降りやまざれば

降るものの人よりもまづ積もりけり我とや物を思ひそめけん

山家　　大江

播磨潟海の藻よりも焼かなの雲海の如

いとゞ住みうき身の憂さの水もたまらぬ

ものゝ煙ばかりとなびく人もなき里

風吹けば一つの降りとなびく

雪とよ降るとも見ゆるかな

鳥　　大育

二村の山乃と寺毛事毛

金毛ら世ん幻未毛寺ね

ま乃一毛毛河東毛乃

祝　　大江

幾年毛云八ん人よ幻毎

ち代よりみの浦をいく年毛かきつゞね

春　二十首　　丹後宣秋門院丹房

霧海　　五首

柳

霧海

山家　　五首

鳥　　五首

祝　かぞ

院御百首第二度　立首題

作者

御製　後鳥羽院

従四位上守大藏卿兼行春宮亮毋後守藤朝範卿

従五位上行侍従臣藤原朝臣雅經

従五位下行能登守臣源朝臣具親

散位隆實　後信一

散位源家長

散位従五位下鴨縣主長明

散位従五位下賀茂縣主季保

宮内卿　廿房
越前　廿房
神主康業　實慈圓前大僧正

詠百首和謌

春

霞

御製

後鳥羽院

花

春

郭公

有明

冬

雪

氷

冬

雜

釋教　十時

花嚴

阿含

方等

般若

法花

涅槃

曉

山路

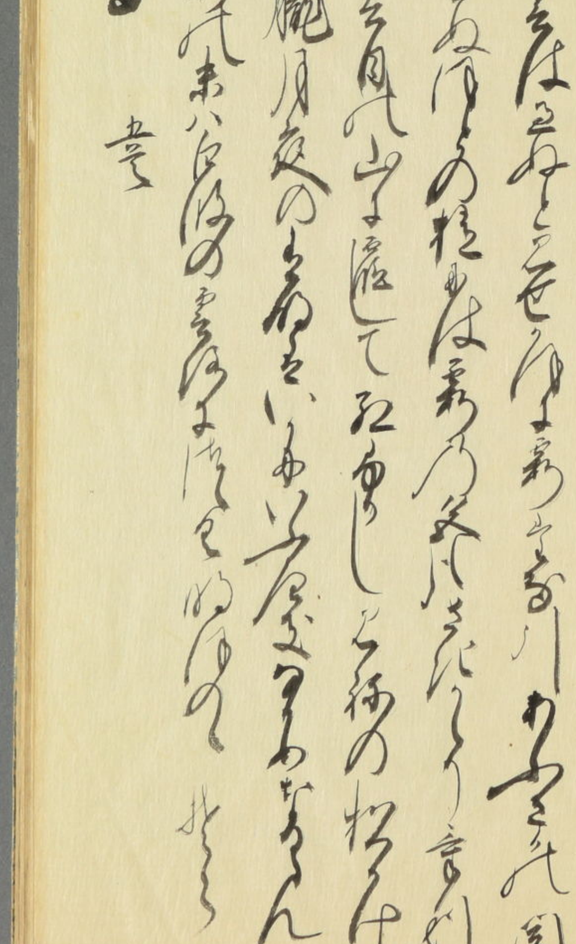
海辺

禁中

招宴

三年

冬日陪　太上皇仙洞應
製　百首和哥
從四位上守大藏卿兼行春宮亮丹後守藤朝臣光上
春部
霞　五首



死　芸

郭公　芸

有明　芸

秋部

草花

冬部

雪

氷

釋教

方便品　若人散乱心　乃至以一花

乱きちる心ろともひとつ花

安樂行品　若於夢中　但見佛事

夢の中ともしとめるまことなり

壽量品　常在靈鷲山

霊鷲山をひてまとも

普門品　弘誓深如海

誓月の海のふかきかたを思ふ

提婆品　経於千歳

年月のたつをしらぬ

暁

文字ふりのかなよりあけぼのの

文字ふりのかなよりあけぼのの

山路　春

宴遊　　肴

公津　　亡

冬日詠百首應製和歌

春

霞

従五位上行侍従臣藤原朝臣雅経上

秋

草花

氷

雪

龍

氷

龍

釋教　六神通

天眼通

天耳通

宿住通

他心通

神境通

暁

宴遊

公事

詠百首應　製衣和歌

従五位下行能登守臣源朝臣具親上

春霞

秋

草花

釋教

色

受

想

行

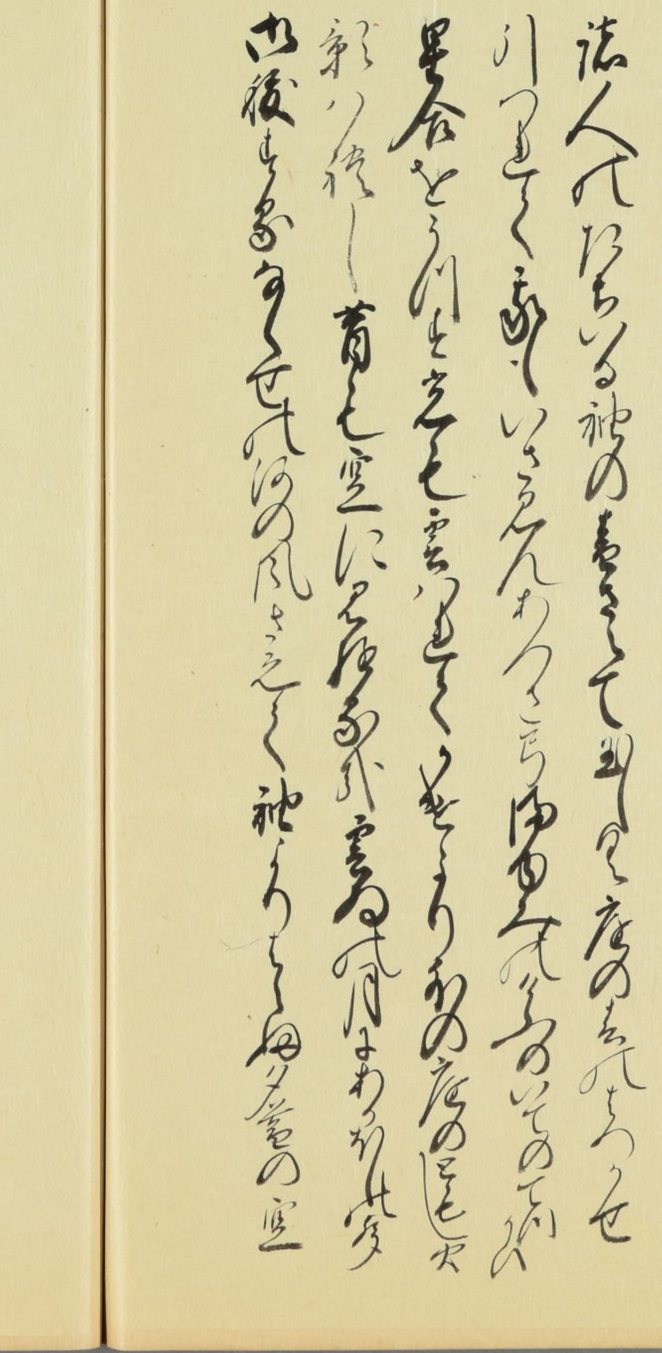
識

暁

山家

海邊

禁中



詠百首　和哥

散位隆實　後二信一

春

霞

今朝見ハ霞の為に埋もれて
雪つもりし柳も春を知顔に
緑の糸をくりかけて
須臾も雪の空に乱れ
ぬるやうにて花の色
ほのかに匂ひ来る
夕暮も霞の為に埋もれて

花

婚

草光

釋迦
序品
藥草喩品
方便品
譬喩品
信解品
藥草品
授記品
化城喩品
五百弟子受記品
授學無學人記品
法師品
見寶塔品
提婆達多品
勸持品
安樂行品
從地涌出品
如來壽量品
分別功徳品
隨喜功徳品
法師功徳品
常不輕菩薩品
如來神力品
囑累品
藥王菩薩本事品
妙音菩薩品
觀世音菩薩普門品
陀羅尼品
妙荘嚴王本事品
普賢菩薩勸發品

寿

祝